

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	社会学 研究科	社会学 専攻
指導教員	所属・職名	氏 名	
	社会学部・教授	奥村 隆 印	
自然・人文の別	人文	個人・共同の別	個人
研究課題名	新聞報道における日本／沖縄の〈家族〉言説の変容過程の比較分析		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	社会学研究科社会学専攻博士後期課程 1年	齋藤 雅哉 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
研究期間	2006年度		
研究経費	200千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

研究は、主に言説レベルにおける「家族に関する社会意識の変容過程」に着目する研究である。例をあげるならば、「家族のきずな」を唱えることは、あるインパクトを持つと考えられる。なぜなら「公的空間」に登場する様々な社会問題に対して、親密圏としての家族を唱導する、という図式を用意することが出来るからだ。そこで、本研究は、「家族のきずな」の語られ方の変遷を明らかにする。そのことで、現代社会における「家族」に関する議論がいかなる水準で展開しているのか、そしてそれをいかにわれわれの日常生活と切り結んでいけるかを考察する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)

[家族のきずな] [社会意識] [コミュニケーション]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

「問題意識」

これまで、日本社会では家族の崩壊がたびたび叫ばれてきた。家族が壊れつつあるのだという。この現象をどのように考えることが出来るだろう。ある人にとっては、家族であることの自明性を疑問視することで「家族からの自由」のチャンスと捉えるかもしれない。一方で「家族の再生」を主張する人達がいる。これまでの多くの研究は家族を巡るこの二つの立場は対比されて描かれてきた。しかし、それは同時に「個人」と「社会 (=家族)」という社会学の黎明期からの問いと重なり問題も含んでいた。「現代の家族」を特徴づけるタームに「家族のきずな」という語彙がある。例えば、私は家族のきずなが大切である」と聞いた時、2つの感覚を持ってしまう。1つは「家族のきずながあるから安心出来る」という感覚。もう1つは「家族のきずなが大切だ」と唱えることで、何でも言える(何も言えなくなる)感覚である。おそらく、われわれは上述した2つの感覚を同時に持ち合わせているのだろう。この感覚にみられるように「家族」という集団と「きずな」という関係を指し示す語彙、この2つの語彙が組み合わさった「家族のきずな」が用いられているのではないか。

多様な家族形態が見て取れる現代社会において、取り戻すべき家族のきずなどは、どのようなものなのだろうか。より一般化して述べるならば「現在の家族」のありようを考えてみたいのだ。確認するまでもないが、2つの感覚は家族という集団において他者 (=家族成員) とのコミュニケーションからもたらされるものといえる。この地点から「家族のきずな」記事に問いを立てることにしよう。これは「家族のきずなどは何か」を明らかにする視点よりも、ある行為における動機を「家族のきずな」という語彙を用いて理解し、納得しているのかを明らかにすることになる。また、このような「語彙」は C・W・ミルズが指摘するように、歴史的、社会構造的に異なるにつれてその内容や時期も変わるものだと考える。つまり、本研究の問題意識は「家族のきずな」という語彙の用いられ方を分析することにある。そこから、家族の現在を把握するための一側面を描くことを目的とする。

上記のことを全国3大新聞から「家族のきずな」という語彙を用いる記事を抽出し、分類、分析をした。また、当初の予定であった地方(沖縄)新聞との比較分析であるが、全国紙と比べ、資料の精査が不十分であった。そのため、全国新聞を位置づける資料として用いた。

また、本研究の外適的ではあるが沖縄県、東京在住の沖縄県出身者に「沖縄の家族について」若干のインタビュー調査を行っている。このことから調査資料の質的な相違があるものの全国(新聞)と沖縄(出身者)の比較分析、もしくは<家族>の現在を考察するための問い設定し、今後の課題とする。

以下、研究成果である。

①理論的検討

上記であげたように、「家族のきずな」という語彙を用いた文脈、現象を理解するために「個人」と「社会」どちらかの立場に立つことは難しい。そこで、個人を基本的単位としながらも、個々人によって行われるコミュニケーション行為とそこで表象されるメタファーとしての装置として「家族」を位置づけ、その関係性に焦点を当てることを提示した。これは、個人化、多様化が進んでいるとされる「家族」をいかに研究対象として把握し、考察をおこなうかを考えるための一視座である。この視点は有賀喜左衛門がおこなった一連の研究に類似性を持つ。言うなれば、有賀研究を捉え直すことで、彼の研究の特徴であった「生活論」の文脈に現在の家族を特徴づける「家族のきずな」という語彙を位置づける試みであったといえる。

②量的変化

全国3大新聞における「家族のきずな」という語彙が用いられた新聞記事の量的変化を明らかにした。朝日新聞では1985年以前に2件のみだったのが、1985年以降増加する傾向がみうけられた。他の2誌においても、同様の傾向が見て取れる。量的変化からの知見は以下である。

- ・「家族のきずな」という語彙の流通が1985年から使われるようになり、1995年前後から各誌、年間100前後の登場回数となった。
- ・時代的背景としては、1985年前後に女性の社会進出について、いくつかの動きが世界的、日本において、行われていた事があげられる。「男性の不安、女性の希望としての「家族のきずな」といえる。
- ・記事数が増加する1995年前後はオウムサリン事件や阪神淡路大震災などの日本の歴史に残る出来事があった。記事数においても、上の2つに関連する記事が多くをしめた。
- ・それ以降は「夫婦別姓」に関する議論との関連で語られるケースが増加した。このことから時代的背景と記事数の増加は相関の関係にあることが伺える。

③質的变化

時代的背景と量的変化の関係を確認した後、質的变化について分類、分析をおこなった。

研究成果の概要 つづき

「家族のきずな」という語彙を用いることで家族に関するどのような文脈が成立しているのかを基準に分類項目を設定した。主に次の3つを分類項目とした。(1) 家族 (2) コミュニケーション (3) 支えあう

各項目の特徴としては(1)では、メタファーとして位置づけた「家族」を表象するようになる。(2)は個人間のコミュニケーション、関係性についての文脈になる。(3)は前の2つの項目の間を往復するようになる。災害や生活上の困難などケースで用いられる。

時代的変遷では(3)の増加とともに、全体的に用いられるケースが増えてきた(1995年ごろ)。それと関連する形で(2)のケースが増加する。これは、困難によって家族関係を問い直すことが求められるようになったと解釈することが出来る。1990年代の後半からは(1)が増加する傾向にある。夫婦別姓に関する議論の高まりなどもあり「家族像」を巡る議論になった時代背景を想定することが出来る。これらの時代的変遷の中で質的变化は2000年代に入ると多様化(拡散)する。

(3)の項目が相対的に減少することに加えて、介護などの文脈に限定されるようになる。

(2)の項目は個人間のコミュニケーション、関係性という文脈を成立させながらも、個人の感情を表現するための語彙として用いられるケースが増加する。注目する点は、個人(もしくは「私」)の感情を理解する語彙として「家族のきずな」が妥当かどうか、という問題である。より具体的にいうならば「家族」も「きずな」という語彙も「複数の個人」の集合体を想起させる語彙である。そのような語彙が「個人の感情」に照準してよいかという問題である。

(1)2000年以降、記事上では「家族のきずなが弱まった」という前提として語られるようになる。2000年以前の記事においては家族成員が登場する機会が(1)においても登場する頻度が高かったが、2000年以降においては前提として話されるケースが増加する。また、モノなどに家族のきずなを見出すケースも増加する。

〔考察〕

上記の3つの項目を踏まえて、考察をおこなった。以下、その概略になる。

「家族」と「きずな」という、それぞれ「集団」と「関係性」を意味づける語彙である「家族のきずな」が新聞紙上で頻繁に用いられるようになったのは1985年以降であった。このことは「女性の社会進出」という時代の潮流と重なり合うものであった。このことからフェミニズムが「社会的な」動きの中で「個人的なことは政治的なこと」という命題を問うていたことが伺えるだろう。そのような個人的なことの重なり合いが「家族のきずな」であると理論的検討のなかで位置づけた。「家族のきずな」イメージは「家族」にそれが偏ることで、保守的なイメージをおびることになるが、「家族」と「きずな」の関係性に焦点を当てることで多様化、個人化が進行しているとする現在の家族に対する理論的な問いを設定した。

次に量的/質的变化では、1995年前後に「家族」と「きずな」の関係がより近いものになったといえる。それは、先にもあげた日本の歴史に残るような出来事があったことによって個人的なことの重なり合いがより強まったからといえる。しかし、2000年前後から量的/質的にも変容が著しくなる。それは、量的に言えば、頻度が年間100件以上と高い点。質的な変化においては対象となるはずの家族成員が登場しないケース、もしくは個人の感情に収斂されるような用いられ方が多くなっている。

このような変化は何を意味するのだろうか。本研究の目的である「現在の家族」について、いくつかの仮説を述べるならば、「現在の家族」において個人的なことが重なり合わなくなっている。本研究の成果から引き出される知見からは「家族のきずな」がより個人の感情で定位する傾向にあるといえる。つまり「家族のきずな」イメージはより「きずな」を強調する文脈が強くなっており、家族がレトリック以上の意味をなさなくなっている。これらはあるモノに「家族のきずな」を見出すようになってきていることから伺える。これまでをまとめるならば、「家族のきずな」という語彙は家族を対象とした語彙ではなく、個人の何かしらの感情を表象、理解するための語彙へと変容している。これは「心の時代」といわれる現代社会の特徴を表しているといえる。

〔まとめ〕

最後に「現在の家族」について。「家族のきずな」という語彙の用いられ方の変遷から「現在の家族」について確認するためのものであった。しかし、新聞記事の分析、その変遷から「家族のきずな」の用いられ方が個人の水準以上には発展していないことが確認できた。「個人」の水準とレトリックとしての「家族」という二極化という言説上の特徴はより実証的な研究を積み重ねることで現代社会に対して積極的な知見を提供出来るものと考え、これからの課題とする。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

齋藤雅哉 2006「新聞報道における〈家族〉言説の変容過程

—「家族のきずな」の位置をめぐって—

第54回関東社会学会 家族・語り部会

———2007「『家族のきずな』表象の変化——『朝日新聞』を事例として——」立教大学
社会学研究科 社会学専攻博士後期課程・院生例会